

手をつなぐ叡智

「特殊文庫」と

「特殊文庫連合協議会」

何かを集めるという行為には様々な理由がある。集めるものへの愛が第一義となるのは勿論だが、対象が書物である場合、理由はそこに留まらないだろう。よりよい世の中を希求し進取の法制度や経済や科学知識を撰取するため、あるいは生老病死の苦しみから逃れ心を平穏に保つ術を知る手段として、古来夥しい書物が集積されてきた。逆に言えば書物という情報を握っているものが覇を唱えることができるのであるから、為政者や宗教者は競って本を収集していた。そして栄枯盛衰により散逸する名家の旧蔵書には美術品同様に付加価値が加わり、後代の愛書家たちはそれを手に入れようと躍起になった。

堆積と散逸を繰り返す古典籍の魔力は、近代以降、時代の覇者を自任する財閥の創始者達にもひとしく作用した。折から吹き荒れる急進的西欧化の嵐の中、公家や大名家の所蔵品が巷間に流出し、国外への散逸が危惧される時代でもあったから、彼らが自国の文化財保護に責務を感じたのは確かであろうが、同時に知識欲と所有欲を満足させるため古典籍に食指を動かしたことも事実であろう。そうした財界人の収集品も多

村木敬子

【文献】 ふんけん

特殊文庫連合協議会が昭和三十四年に創刊した学術雑誌。古典籍に関する論考のほか加盟機関の資料紹介や活動報告、地方や海外の図書館探訪記など、広く情報を集め、本の所蔵者や施設同士の交流を図ることを目的としていた。昭和四十五年の第十四巻を最後に終刊。

アジア文化図書館・大倉精神文化研究所・金沢文庫・興風会図書館・国際文化振興会・静嘉堂文庫・前田育徳会尊経閣文庫・大東急記念文庫・東洋文庫・成田図書館・蓬左文庫・無窮会図書館（五十音順）の十二庫。翌年の十二月に慶應義塾大学図書館斯道文庫、天理図書館、神宮文庫が、次いで阪本龍門文庫・叡山文庫・三井文庫・三康文化研究所が加わり、途中で退会する機関もあったが、これらの文庫が活動の中心となっていた。

活動内容としては、先述の機関誌「文献」の刊行が挙げられる。同誌は読者を募って会費を集め、さらに古書店からの刊行援助金も得て、昭和三十四年三月に創刊、研究発表や会員相互の情報交換の場として機能していた。昭和三十六年七月にはハーバード燕京図書館の基金により「特殊文庫所蔵マイクロフィルム連合目録」を刊行、九月には「特殊文庫連合協議会主催第一回講演会」と銘打ち、大東急記念文庫において二回の講演が行われた（第一回は村田正志・東京大学助教授「太平記について」、第二回は石原 明・横浜市立大学講師「日本における解剖図」）。

そのほか「漢籍叢書所在目録」「東洋関係特殊文庫要覧」の刊行、「我が国現存の宋元版本及びその抄本の調査研究」をテーマとした科研費助成金の申請、さらには全国の古典籍の所蔵先の目録化と

くは生々流転の憂き目にあうども、幸いに戦後の混乱期を経てなお存続し得ているコレクションがある。それらが「特殊文庫」と呼ばれる存在であり、特殊文庫同士が連帯した活動組織が、昭和三十三年（一九五八年）に創設された「特殊文庫連合協議会」であった。

同機関誌「文献」の「刊行のことば」によると、同会は「日本はもとより、広くアジアに関する文献を主体として所蔵する特殊文庫の集り」である。大量の貴重な典籍が「さきの大戦に災害にあい、又これにつゞく戦後の混乱によって国外に流出し」散逸したため、残存する文献の保存と利用がますます重要となったが、それらを所有する特殊文庫は「従来夫々の伝統のもとに、分散的に、個別的に運営され、時には一般研究者に対して閉鎖的傾向を有するものすらあった」。そこで「相互に連絡協力して文献の保存と公開利用の文化的使命を達成するために」結成されたのが同会であった。

金沢文庫には同会の古い議事録が保管されており、運営の様子を知ることができる。発足当初の会員は

いう、のちの「国書総目録」のような遠大なプランが議事録を賑わしている。また時代の空気を映すものとして、東京オリンピック期間中の「全国私設文庫主催 日本文化特別展覧会」の開催、海外での日本文化展覧会なども提案されているが、いずれも日の目をみていない。一方、政府に対する特殊文庫の税制上の優遇措置や文化財修理補助金の要求など、会として実際のアクションを起こすには至らなかったが、現行の文化財保護政策を先取りしたような提言も見受けられる。

戦後の文化行政に対する危機意識から出発した協議会も、加盟機関がそれぞれ独自の機関誌を発刊するなど安定した路線を歩み始めるにつれ活動規模が縮小され、一昨年十月、ついにその歴史の幕を閉じた。様々な形態の運営母体による文庫の連合体が足並みを揃えて活動するのは困難であり、解散は無理からぬことではあった。そもそも書籍蒐蔵の悠久の歴史においては「特殊文庫」という存在自体、一つの過渡的形態といえるのかも知れない。「美術館」「博物館」といった、視覚の喜びを謳う華やかな文化施設の蔭にあって、鑑賞だけではなく読んでこそ価値のある古典籍を扱う「文庫」は、一般の人々には今や遠い存在である。しかし過去の書物から叡智を汲み出す営みが再び広く求められる時代が到来することを信じ、私たちは手を携え、それらを守り伝える手段を探り続ける必要があるだろう。